

讀様ニシテ、蝦蟇ノ方へ投遣タリケレバ、其ノ草ノ葉、蝦蟇ノ上ニ懸ルト見ケル程ニ、蝦蟇ハ眞平ニヒシダテ死タリケル、僧共是ヲ見テ、色ヲ失テナム恐テ怖レケル、此晴明ハ家ノ内ニ人無キ時ハ、識神ヲ仕ケルニヤ有ケム、人モ無キニ葦上ゲ下ス事ナム有ケル、亦門モ差ス人モ無カリケルニ、被差ナムトナム有ケル、此様ニ希有ノ事共多カリトナム語リ傳フル、其孫子今公ニ仕テ、止事无クテ有リ、其土御門ノ家モ、傳ハリノ所ニテ有リ、其孫近ク成マデ、識神ノ音ナドハ聞ケリ、然レバ晴明尙只者ニハ非リケリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔宇治拾遺物語〕昔晴明陣にまいりたりけるに、さきはなやかにをばせて、殿上人のまいりけるをみれば、藏人の少將とて、まだわかく花やかなる人の、見めまことにきよげにて、車よりおりて内にまいりたりけるほどに、この少將のうへに鳥のとびてとをりけるが、急をまかけ、るを、晴明きとみて、あはれ世にもあひ、年などもわかくて、見めもよき人にこそあんめれ、まきにうてけるにか、このからすは、まき神にこそありけれと思ふに、まかるべくて、此少將のいくべき報や有けん、いとおしう晴明が覺て、少將のそばへあゆみよりて、御前へまいらせ給か、さかしく申やうなれど、なにかまいらせ給ふ、殿は今夜えすぐさせ給はじと見奉るぞ、まかるべくて、をのれにはみえさせ給へるなり、いざさせ給へ、物心みんとて、このひとつの車にのりければ、少將わなきて、あさましき事かな、さらばたすけ給へとて、ひとつ車にのりて、少將の里へいでぬ、申の時計のことにてありければ、かくいでなどしつるほどに、日もくれぬ、晴明少將をつといたきて、身がためをし、又なに事にか、つぶくと夜一よいもねず、こゑもたえもせず、讀きかせ、かぢしけり、秋のよのながきによくししたりければ、あかつきがたに、戸をはたくとた、けるに、あれ人出してきかせ給へとて、きかせければ、この少將のあひ、聳にて、藏人の五位のありけるも、おなじ家にあなたこなたにすへたりけるが、此少將をば、よき聳とてか、しづき、今ひとりをばことの、外に